

観光地の博物館における 地域の価値を再発見するための取り組み

面河山岳博物館 学芸員 矢野 真志

1. 面河山岳博物館について



図1. 面河山岳博物館外観

面河山岳博物館（図1）は西日本最高峰の石鎚山を有する石鎚国定公園、そして名勝面河溪の自然と人文をテーマとした郷土博物館で、平成3年4月の開館から間もなく28年目を迎える。開館からの14年間は人口わずか1,000人の面河村が直営し、平成16年4月以降は町村合併により誕生した久万高原町（人口約8,500人）が管理・運営を行っている。現在の常勤職員は事務1名と学芸員1名で、4～11月までの観光シーズンは受付清

掃業務担当として臨時職員1名を雇用。スタッフは少人数であるものの、この地域の山岳関係資料や昆虫標本を中心に所蔵資料は5万点を超し（登録資料点数は約33,000点）、隔年ではあるが愛媛県や石鎚山系の自然史を中心とした研究報告書を発行している。また、年3回の企画展示や講演会、自然観察会など幅広い教育普及活動を展開し、自然史系博物館が少ない愛媛県において自然科学普及の一翼を担っている。入館者数（図2）は一時期年間6,000人を下回る年も続いたが、近年は約8,000人前後で推移し、20年ほど前の水準に戻りつつある。年間入館者数を維持もしくは増加させるには夏期特別展での動員数が大きく影響している。本来的な設立趣旨から言えば、石鎚山系や面河溪をテーマとした展示事業を企画すべきであるが、夏期に限っては登山やハイキングを伴わない家族単位での来館が多く、多様な展示テーマを求められていることから、比較的地域性の薄い展示（近年で言えば、危険生物や巨大昆虫、両生類など）を実施している。この夏期展示の人気は非常に高く、年間入館者数の約半数を占めるほどになっている。

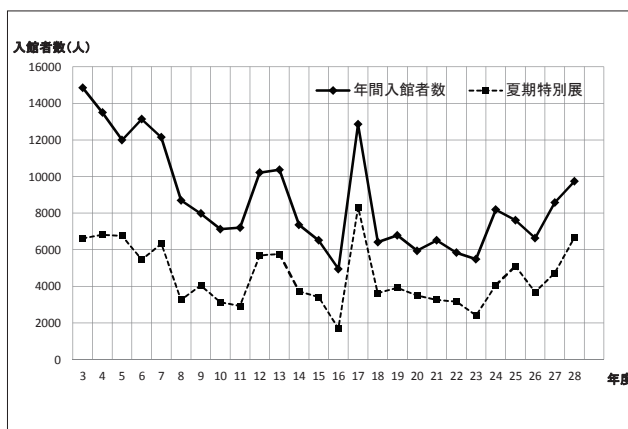


図2. 面河山岳博物館の年間入館者数推移

2. 観光地の博物館ゆえの課題

当館の条例では、その設置目的を「町民の知識及び教養の向上並びに町民の教育、学術及び文化の発展に寄与するため」とし、その事業は「町民の実生活の向上に資する」ものとしている。つまり博物館活動の受益者は地域住民であり、その成果により生活の質の向上を目指すことが求められている。しかし実際は、住民向け社会教育施設というより観光施設として運営せざるを得ない現状がある。当館は名勝面河溪の入口、そして石鎚山への主要アクセス道路である石鎚スカイラインの



図3. 石鎚スカイラインから見た石鎚山

起点近くに立地している。石鎚山(図3)には年間50万人近くが訪れるが、大半は北側(瀬戸内側)からのルートを利用し、面河溪や久万高原町が含まれる南側からの利用は約20%と偏りがある。とは言え、年間10万人近くの登山者や観光客が訪れていることから、彼らを主なターゲットとするのは至極当然なことである。当館が純粋な博物館活動だけでなく観光施設としての業務、例えば公衆トイレ管理や面河溪への道案内、旅行会社や観光バス等団体からの雑多な問い合わせへの対応に時期によってはかなりの手間を取られ、直接的な住民還元に当たる事業に時間が割けにくくなるのは、この立地条件からは避けられない。また、この立地が住民の余暇利用時の導線上に乗っていないという物理的障害もある。山間部に位置する久万高原町は愛媛県下で最も面積の広い自治体で、当館が活動の拠点としている面河溪は中心部から約40キロ離れた奥地にある。しかも愛媛県都の松山市とはほぼ真逆の方向だ。住民が土日などの余暇時間を有効に使おうと、レジャーや買い物で松山市方面に車を走らせることは、ごく一般的な山間部の生活スタイルである。休みの日、往復80kmをかけて博物館の展示を見に行き、イベントに参加することのハードルが決して低くないのは、町中心部で生活している筆者自身にも十分理解できる。数根的な根拠はないが、このような悩みを抱えた博物館は、中山間地の比較的有名な観光地をもっている自治体に多いのではないだろうか。

しかし、筆者が最も危機感を抱いてきたのは住民利用者数が伸びにくい点ではない。住民と博物館との物理的な距離から、「博物館がやっていることは自分たちに関係がない」という無関心に陥りやすい点だ。もちろん博物館が何をしているのか知られていなくても、町外からの交流人口を増やす取り組み、つまり博物館を観光資源化することで、高い経済効果が得られ、町のイメージアップや自然・文化への理解が成されれば、間接的に地域振興を果たしていると言える。しかし、地域の誇りともいえる面河溪や石鎚山の自然と人文を紹介している当館の活動への無関心は、我が町の価値を知る機会の喪失に繋がる。地域にどんな価値があるのか、より詳しく知る機会を失うことは地域の価値自体を失うことに等しい。

3. 住民が関わりたくなる博物館へ向けて

林業と農業と観光の町、久万高原町の主な資源は自然である。そこで当館は、元々地元が存在しているが知られていなかった、また知ったつもりになっていた自然環境や生物などの地域資源を科学的な視点で紹介するなど、住民自らが楽しみながらその価値に改めて気づくための取り組みを強化した。つまり、これが地域の価値の再発見である。この再発見をベースに環境保全を視野に入れた観光業等の産業の発展を目指すことがその先にある。しかし、観光施設としての当館の有り様と住民からの物理的な距離が存在する以上、面河溪や石鎚山をテーマとした活動で正攻法的に攻めても効果が得られにくいのは明らかだ。そこで地域住民に対しては、これら奥地の自然環境と地続きの足元の自然に目を向けてもらうことを最重要視することとした。ごく身近な自然でワクワクさせてくれる博物館であれば、住民が主体的に博物館に関わりたくなると考え、以下の2つの事業を平成20年以降スタートさせた。

4. 住民自らによる「地域の価値の再発見」を目指した事業

1) モモンガクラブ

このクラブは地域版生物部として、平成20年度に結成された。月1回程度、生物調査や自然観察会（図4）などを行うことで会員に地域に根差した自然科学を学んでもらうと同時



図4. イタドリの調理法を学ぶ野草観察会

に、博物館の存在自体を楽しんでもらうことを目指している。クラブ名称は結成当時の会員で決めたが、これは最初の数年間、巣箱を使ったニホンモモンガの生息調査に力を入れていたのが元となっている。所謂、博物館友の会的な集まりであるが、募集対象を久万高原町民に限定した点が大きく異なっている。これは単に間口を広くとって会員数を増やしてしまうと、当館のような小人数スタッフでは会員管理すらままならない、という仕事量の限界を考慮した側面もあるが、コアな学びを期待する住民を囲い込むことで博物館ファンを育てる意味も大きい。毎年度会員は更新されるが、平成29年度でいえば会員数は50名を超し、この10年間ではのべ270名が会員となっている。当初は小学生とその保護者が大半を占めていたが、町広報や新聞誌面等でその活動が広く知れ渡ることによって、近年は大人

単独の参加が半数近くを占めるようになった。これまで78回のイベントを実施し、延べ参加者は1,081名、30回を超すマスコミの取材を受け、地方ニュースや新聞記事として紹介

されている。平成 29 年 2 月には、地域住民自らが地元の自然を理解する活動を続けている点が高く評価され、愛媛県内の環境保護活動に取り組む個人・団体に贈られる「三浦保環境賞」の県奨励賞を受賞した。現在、途中入会や次年度入会を希望する住民の声が多く、博物館に関わりたいと考える住民が増えつつあることを実感している。

【表 1. モモンガクラブ実績一覧（平成 27 ～ 29 年度）】

年度	日 時	内 容	場 所	人数
27	4/29 10～12 時	イタドリとタンポポ	面河山岳博物館周辺	12
	5/31 10～12 時	地衣類観察会	面河溪	12
	6/28 10～12 時	アマゴと水生昆虫	面河山岳博物館周辺	19
	7/28 19～21 時	夜の生き物観察会	町内笛ヶ滝公園	15
	9/10 18～20 時	コウモリ観察会	面河山岳博物館周辺	14
	11/15 10～12 時	水晶採集会	町内畑野川千本高原	12
	12/12 10～12 時	クリスマスリースを作ろう	町立久万美術館研修室	13
28	4/29 10～12 時	春の野草をもりもり食べよう	面河山岳博物館周辺	22
	5/21 10～12 時	マダニを調べよう	町内ふるさと旅行村	15
	6/10 19～21 時	カエル観察会	町内上浮穴高等学校周辺	14
	7/23 19～21 時	夜の生き物観察会	町内笛ヶ滝公園	14
	9/11 10～12 時	スズメバチを知ろう！	面河山岳博物館周辺	7
	10/30 10～12 時	草木染教室	町民館調理室	14
	11/12 10～12 時	高温石英採集会	町内畑野川千本高原	14
29	4/29 10～13 時	春の野草を食べる会	面河山岳博物館	25
	5/21 10～12 時	岩石・鉱物採集会 in 御三戸	美川支所、御三戸	11
	6/17 10～12 時	水路の川魚採集会	町内菅生の水田、町立図書館	18
	7/27 19～21 時	夜の生き物観察会	町内笛ヶ滝公園	15
	9/30 10～12 時	面河溪のコケ観察会	面河溪	13
	10/14 10～12 時	面河溪のキノコ観察会	面河溪	8
	11/18 10～12 時	高温石英採集会	町内菅生高野展望台	15
	12/9 10～12 時	クリスマスリース作り	町立久万美術館	21

2) 夜の講座

平日の夜、仕事帰りや夕食後の空いた時間に、気軽に地域の自然科学を学んでもらう機会として、夜 7 時からの 60 分間という比較的短時間の講演会「夜の講座」を平成 25 年からスタートさせた（図 5）。内容は久万高原町や石鎚山系、愛媛県といった地元の範囲に限った生物に関する話題が中心で、タイトルには「愛媛の～」「久万高原の～」という冠がつくようにした。町民限定の企



図 5. 夜の講座の様子

画とはせず、新聞のイベント告知欄やブログで県内一円に向けて紹介したが、町内では防災無線放送や国道の電光掲示板、町広報誌、自治会配布文書（月 1 回、町内すべての自治会で案内チラシが回覧される）などで何度も耳と目に残る形で広報した。参加者の年齢層は夜開催のため中学生以下は少ないが、若者から中高年まで幅広い。講師は当館学芸員が担当することもあるが、より幅広い話題を提供するため、主に県内の若手研究者や博物館職員、大学教員などに登壇してもらった。内容は一般向けではあるが決して子供を対象としたレベルではない。このサジ加減が難しく、講師とは事前打合せになるべく時間をかけ、客層や雰囲気を理解してもらうことでミスマッチがおこらないように心がけている。この 5 年間で 23 講座を実施し、939 名が受講している。そのうち町民が占める割合は 60% と高いことから、地域住民の科学リテラシー向上に一定の役割を果たしていると言えるだろう。

【表 2. 夜の講座実績一覧（平成 27 ～ 29 年度）】

年度	日時	内 容	人数	講師
27	5/15	石鎚山系の地形	45	NPO 法人西条自然学校理事長
	6/18	久万高原のクワガタムシ	40	当館学芸員
	7/30	久万高原の両生類	28	当館学芸員
	9/16	カメムシの話	26	当館学芸員
	10/6	四国のコウモリ	45	認定 NPO 法人四国自然史科学研究センター・センター長
	11/11	久万高原の鉱物	83	元愛媛大学理学部教授
28	4/15	愛媛と久万高原の藻類	18	愛媛県総合科学博物館学芸員
	5/11	四国と石鎚のソウシチョウ	38	認定 NPO 法人四国自然史科学研究センター・副センター長
	6/15	久万高原の森と人	48	久万林業活性化センター研究員
	10/28	身近な危険生物	40	当館学芸員
	11/30	久万高原の地質	35	元愛媛県総合科学博物館学芸課長
29	4/26	四国のツキノワグマ	48	認定 NPO 法人四国自然史科学研究センター・主任研究員
	5/11	愛媛の外来哺乳類・鳥類	39	NPO 法人西条自然学校理事長
	6/15	木の香りと人のくらし	33	愛媛県農林水産研究所林業研究センター研究員
	9/29	コケの話	56	愛媛県立三間高等学校教員
	10/27	愛媛と久万高原のキノコ	39	愛媛県総合科学博物館学芸員
	11/29	久万高原のスズメバチ食文化	56	当館学芸員

5. 課題と今後の可能性

これら 2 事業により、以前と比べて当館が地域住民の関心を惹き、その繋がりを密にでき始めていることは間違いない。モモンガクラブ会員は夜の講座への参加率が高く、最も「地域の価値の再発見」を理解している人材に育った。夜の講座受講者はリピーターが増え、ごく気軽に自然科学を楽しむ土壤が育まれている。これらの人々のうち幾人かは積極的に展示を楽しみ、同定依頼や雑談をしに博物館へ足を運んでくれるようになった。物理的な距離を超えるのは

簡単でないが、心理的には住民生活に博物館が溶け込みつつある。博物館に関わりを持つことが実は地域の価値の再発見そのものであることに、より多くの住民が気付き始めているのではないだろうか。

モモンガクラブの結成当初は、県内でも希少と考えられていたニホンモモンガの分布調査を主要な活動としていた。これは後々、積極的な保全活動に携わってくれる人材づくりを意識していたのだが、ごく普通の小学生や保護者を巣箱設置のためのきつい山登りや地味な巣箱確認作業に2時間3時間とつきあわせていた。専門家が取り組むそこまでの突っ込んだ調査が面白いと思える人材は、小さな町にそういるはずがなく、参加者数の減少を招いた。目的に縛られすぎ、手段に遊びや余白がなかったのが問題だった。この失敗により、自走することを前提とした住民の組織づくりや仕組みづくりに固執してはならないことに気が付いた。その後は参加者がいかに楽しむか、という観点を重視して企画を組むようにしている。とは言え、いつまでも「楽しむ土壌」を耕し続けているわけにもいかず、そろそろ価値の再発見による目に見える成果を出し、地域と博物館の価値を高めていかねばならない。町内や面河溪といった「場所の専門家(トコロジスト)」の育成やモモンガクラブの活動で再発見できた地域の価値の資源化(例えばツアーのプログラムに組み込む)など、今後は新たな動きを模索中である。

今回紹介した当館の取り組みは決して新しいものではない。既に友の会や一般向け講演会等の活動として実績と成果を積み重ねている館が多いはずだ。一方で限られたスタッフ数や予算、住民が利用しにくい立地条件の中、設立目的と実際の活動のズレというジレンマを抱えながらも、どうやって博物館活動を地域振興に結び付けていくか苦慮している小規模館が多いのも現実だろう。「開かれた博物館」を目指すのは当然であるが、閉じた中で開く、というさじ加減も地域振興を進める上では効果的な場合もある。博物館による地域振興の形はケースバイケース、地域の実情に合わせて対応していかねばならない正解のない戦いだ。当館の取り組みがどこかの小さな館の参考になれば幸いである。